

(てんでんこ) 自然エネ100% : 12 只見川

2018年6月23日05時00分



遠藤由美子さんと只見川＝福島県三島町

■故郷の川は東京に電力を送った。「返してもらってもいいんじゃないか」

奥会津書房代表の遠藤由美子（えんどう ゆみこ）（69）は、霧の只見川が好きだ。夏の早朝か、夕暮れ。白い霧に浮かんだふるさとの街は一枚の絵に変わる。ただ、いつもそばにあった流れには「よその人のもの」との思いも重なる。

只見川は尾瀬沼を源として福島県会津地方の険しい山地を流れ、豊かな水流は新潟県で阿賀野川となって日本海にそそぐ。遠藤が生まれた昭和20年代は戦後復興に向

け、東京など都市部の電源を確保するため、ダムが次々と建設された。宮下ダムに続き、下流の柳津ダム、上流に上田ダム、本名ダム……。昭和30年代にかけて九つの巨大ダムが誕生した。

遠藤が住む福島県三島町の人口は、昭和25（1950）年のピーク時には今の4倍余りの7721人だった。上流の只見町には映画館やボウリング場もでき、「5万都市が誕生する」とも期待された。「敗戦でズタズタになった東京、日本の国土を再建するためにサポートする。電源開発が会津の使命だったとしたら、それなりに果たしたと思う」

只見線の鉄路は新潟県の小出までつながった。ダム工場の物資運搬専用の軌道も、昭和30年代の終わりに国鉄に編入された。この鉄道で若者は東京方面の大学、職場へと出た。遠藤も20年間、故郷を離れた。

電源開発の歴史を否定しようとは思わない。でも、只見川は「親しめない。遠い存在」だった。3年前、三島町の仲間と小水力発電所をつくろうとしたら、送電線の空き容量がない、と電力会社に言われた。これまでも主要な送電線はみな、東京向きだった。

「電力生産地と消費地は対等ではなかった。その関係を組み直し、エネルギーを自分たちの手に取り戻そう」。東日本大震災がその思いを強くさせた。2013年、会津電力を有志で立ち上げる。地元8市町村からも出資を受けた市民電力は今、県内70カ所の太陽光発電施設で5068キロワットの電力を生む。

社長の佐藤弥右衛門（さとうやうえもん）（67）は言う。「只見川も猪苗代湖の水も元々地域が守ってきたものだった。そろそろ返してもらってもいいんじゃないか」。その小規模水力発電の建設が間もなく具体化する。先に設立した「会津自然エネルギー機構」は、きこり育成などで荒れた山林の再生をめざす。「故郷の森と水」を取り戻す戦いが本格化する。

（菅沼栄一郎）